

トマトにおいてトマトキバガによる被害を初めて確認しました。 トマト圃場等への飛び込みや発生に注意しましょう。

[現在の状況]

- ① 令和 8 年 8 月に県内の施設栽培トマト圃場において、果実にトマトキバガと疑われる幼虫の寄生が認められ（写真 1）、病害虫防除所でトマトキバガの幼虫であることを確認した。また、同圃場ではトマトキバガ幼虫による特徴的な葉の食痕を確認した（写真 2）。
- ② 県内における本種の発生については、令和 5 年 10 月にフェロモントラップへの誘殺が初めて確認されていたが（令和 5 年 10 月 24 日付け病害虫発生予察特殊報第 1 号）、農作物での被害が確認されたのは初めてである。

[トマトキバガの形態の特徴]

- ① 成虫は、翅を閉じた静止時で体長 5～7mm（前翅長約 5mm、開張約 10mm）。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在する。後翅は一様に淡黒褐色で、翅頂下でえぐれる（写真 3）。
- ② 終齢幼虫は、体長約 8mm、体色は淡緑色～淡赤色で、頭部は淡褐色である。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある。

[トマトでの被害の特徴]

- ① 茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の被害は、ハモグリバエ類の食痕と類似するが、ハモグリバエ類は線状に食痕を残すのに対し（写真 4）、トマトキバガは面的に食痕を残す。トマトキバガの食害部分は表皮のみを残した薄皮の袋状になり、葉の裏面からでも透けて見える。
- ② 果実では、幼虫が食入して内部を食害し、数mm程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分から二次的に腐敗する（写真 5）。

[防除対策]

- ① 施設栽培では、開口部に目合い 0.8mm 以下の防虫ネットを設置し、施設内への侵入を防ぐ。施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。
- ② 圃場をよく観察し、初期の被害を見逃さないようにする。
- ③ 被害葉や被害果は、圃場から持ち出し、野外に放置せずに、ビニル袋に入れて一定期間密閉して成幼虫を死滅させるなど、適切に処分する。
- ④ 本種は、マルチ等の農業資材にも付着している可能性があるため、栽培終了後は野外に放置せずに、適切に処分する。
- ⑤ トマト、ミニトマト圃場で発生が認められた場合は、発生を拡大させないため、表を参考にトマトキバガに登録のある農薬を散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる農薬をローテーション散布する。

表 トマト・ミニトマトのトマトキバガに登録のある主な農薬
(使用方法「散布」の登録内容を記載)

(令和8年9月10日現在)

IRAC コード ¹⁾	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用 方法	本剤の 使用回数	有効成分毎の 総使用回数
5	ディアナSC	2,500～5,000倍	収穫前日まで	散布	2回以内	2回以内
6	アニキ乳剤	1,000倍	収穫前日まで	散布	3回以内	3回以内
	アフーム乳剤	2,000倍	収穫前日まで	散布	5回以内	5回以内
13	コテツフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	散布	3回以内	3回以内
28	フェニックス顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	散布	2回以内	2回以内
	プレバソンフロアブル5	2,000倍	収穫前日まで	散布	3回以内	4回以内 ²⁾³⁾
	ベネビアOD	2,000倍	収穫前日まで	散布	3回以内	5回以内 ⁴⁾
30	グレーシア乳剤	2,000倍	収穫前日まで	散布	2回以内	2回以内
UN	プレオフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	散布	2回以内	2回以内

1) 殺虫剤抵抗性対策委員会 (IRAC) により、殺虫剤の有効成分を作用機構により分類し、コード化したもの。

2) 但し、定植時までの処理は1回以内、散布は3回以内 (トマトに使用する場合)

3) 但し、灌注は1回以内、散布は3回以内 (ミニトマトに使用する場合)

4) 但し、定植時までの処理及び定植直後の株元灌注は合計1回以内、定植後の株元灌注は1回以内、定植後の散布は3回以内

(注意事項)

農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・回数・注意事項等を確認のうえ使用して下さい。

また、農薬散布の際は、周辺作物への飛散(ドリフト)に十分注意して下さい。



写真1 トマトキバガ幼虫



写真2 トマトキバガ被害葉



写真4 ハモグリバエ類被害葉



写真3 トマトキバガ成虫



後翅のえぐれ



写真5 トマト果実の食害

(写真3および5は農林水産省植物防疫所原図)